

幼稚園における動物介在教育の実践

—CoP-AAEの構築を通じた共同研究の試み—

谷田 創 木場 有紀 金岡 美幸 掛 志穂
君岡 智央 吉原智恵美 中山美充子 池田 明子
井上 由子 東 加奈子 坪田 志保 山中 覚美
宮谷 智子 川崎 智浦
(協力者) 森元 真理 於保 伸子

1. はじめに

本研究は、動物介在療法の流れを汲む「動物介在教育」を通して、「いのち」の大切さ、他者への思いやり、自然環境への配慮を教えることで、肉体的にも精神的にも健康な子どもたちを育てることを目的とする。具体的には、様々な分野の専門家が研究分担者・研究協力者として参加する「CoP-AAE：動物介在教育のための実践コミュニティ」の構築を通して、幼稚園で実践可能な「子どもたちのための心を育む動物介在教育プログラム」の開発に取り組む。

「動物介在教育」(Animal Assisted Education: AAE)とは、生き物を介して、命の大切さや他者への思いやり、自然環境に対する興味、生き物に関する理学的知識を育む教育のことである。

実践コミュニティ (Community of Practice: CoP)とは、あるテーマに関する関心や問題、熱意などを共有し、その分野の知識や技能を、持続的な相互交流を通じて深めていく人々の自発的な集団のことである。実践コミュニティの構築を通して、組織あるいは職位を超えてさまざまな人々が交流することを促し、貴重な知識を有効に活用し、与えられた課題を組織的に解決することが可能となる。

2. 研究の目的と予備研究について

本研究の目的は、子どもの心と体を育むための効果的な「動物介在教育プログラム」を開発することである。昨年度(平成21年度)は、「動物介在教育実践コミュニティ」を立ち上げ、「子どもに対する4つの動物介在教育の実践手法」に関する予備研究を、広島大

学大学院生物圏科学研究科の谷田研究室、広島大学附属三原幼稚園、広島大学附属幼稚園、広島アニマルケア専門学校、福山平成大学と共同で行った。

本年度は、昨年度と同様に「動物介在教育のための実践コミュニティ (CoP-AAE)」のメンバーと、「自然体験を通じた教育の実践と効果の検証」「動物の訪問による命の教育」「動物飼育・世話体験を通じた共感教育」について共同研究を行ったのでその内容について簡潔に紹介する。

3. 方法

1) 「動物介在教育のための実践コミュニティ (CoP-AAE)」の平成21年度研究成果報告会の実施

実践コミュニティの全メンバーが広島大学大学院生物圏科学研究科に集い、平成21年度の研究成果についての報告会を実施するとともに、平成22年度の研究活動方針について確認することとした(平成22年4月21日開催)。

2) 「動物介在教育・食農教育・環境教育」に関する保護者向け勉強会の実施

これまでに実践コミュニティのメンバーが行ってきた研究成果を基に、広島大学附属三原幼稚園において保護者向けの勉強会を実施した。実践コミュニティの目標の一つに、「組織あるいは職位を超えてさまざまな人々が交流することを促し、貴重な知識を有効に活用する」ことがある。幼児の保護者に対する研究成果発表と勉強会を通じた交流の場は、実践コミュニティの重要な役割の一つであると考えられる。

Hajime Tanida, Yuki Koba, Miyuki Kaneoka, Shiho Kake, Tomocika Kimioka, Chiemi Yoshihara, Humiko Nakayama, Akiko Ikeda, Yoshiko Inoue, Kanako Higashi, Shiho Tsubota, Satomi Yamanaka, Tomoko Miyatani, Chiho Kawasaki, Mari Morimoto, Nobuko Oho: The trial of animal assisted education in kindergarten

勉強会では、保護者にとっては馴染みのないと思われる「動物介在教育」を中心に、パワーポイントを用いてできるだけ平易にその内容を解説した。本勉強会では、動物介在教育について、保育者だけでなく、保護者に対しても理解を深めさせることに重点を置いた（平成22年10月13日開催）。

3) 「動物介在教育のための実践コミュニティ (CoP-AAE)」の平成22年度研究成果中間報告会の実施

本実践コミュニティは、動物介在教育に関する関心や問題、熱意などを共有し、その分野の知識や技能を、持続的な相互交流を通じて深めていく人々の自発的な集団である。その持続的な相互交流の一環として、平成22年度上半期に実施した研究成果についての中間発表を、広島アニマルケア専門学校において行った。参加メンバーは、広島大学大学院生物圏科学研究科谷田研究室の教員及び学生、福山平成大学子ども学科の教員及び学生、広島アニマルケア専門学校専攻科の教員及び学生とした。動物介在教育に関するそれぞれのプロジェクト研究の中間成果を発表するとともに、研究内容についての討論を行い、メンバーの相互交流を図ることとした（平成22年10月23日開催）。

4) 幼児に対する動物介在教育に関する研究プロジェクト

① 幼児のための自然体験を通じた環境教育に関する共同研究（広島大学大学院生物圏科学研究科—広島大学附属三原幼稚園—広島大学附属幼稚園による共同研究）

「自然」とは、「森や海、川といった、いわゆる野生生物が生息・生育する空間」を指し、「環境教育」とは、「持続可能な社会を形成するための教育」と定義されている（環境教育がわかる事典，2001）。本研究では、生涯発達の中で様々な側面が急激に発達する特別な時期であり、人間形成の基盤が作られる幼児期に、自然を通じた環境教育を行う。知識の記憶や理解だけでなく、体験を組み合わせ、自然を慈しむ心を育てるとともに、子どもの身体的健康の向上（運動の増加と質の高い睡眠など）を目指すことで、持続可能な社会の形成に貢献することを目的とする。

調査は、2010年9月～12月に広島大学附属三原幼稚園と広島大学附属幼稚園で実施した。調査は、両幼稚園の幼児（主に5歳児）を対象として、彼らの自然体験を中心に参与観察するとともに、幼児の手首に3日間にわたりアクティウオッチをつけてもらい、この機器によって、幼児の日常生活に影響することなく、運動量、運動パターン、睡眠時間、睡眠パターンなどを



図1 アクティウオッチ装着例

簡易に計測することが可能であるのかを調査した（図1）。

② 犬の訪問による命の教育—幼稚園に対する犬の訪問活動を通じた動物介在教育に関する共同研究（広島大学大学院生物圏科学研究科—広島アニマルケア専門学校）

日常的な自然体験や動物飼育が困難な幼稚園については、動物の訪問活動による介在教育が自然体験に代わる教育として効果的であると考えられる。また、近年は空前のペットブームで、わが国における犬の飼育頭数も急増しているが、その一方で幼児に対する咬傷事故も増えていると言われている。そこで本研究では、昨年度に引き続いて、広島県下の幼稚園に対して犬の訪問活動を行い、犬との関わりを通じた、「子ども達の心の教育」と「犬との適切な関わり方に関する教育」を実践したいと考えた。

広島県の私立幼稚園を中心に参加園を募り、希望する幼稚園の中から活動条件（1園あたり年長児約30名）に合った4園を選出した。訪問活動に用いた犬はすべて介在教育のための訓練を受けた介在犬で、最大で8頭の犬が参加した。活動プログラムは、昨年度の活動の問題点を踏まえて内容を一新し、「介在犬に関する事前授業用DVD映像の作成と幼稚園における上映会」「犬とのふれあいを中心とした動物介在教育活動」「犬との運動会を中心とした動物介在教育活動」を各園に対して定期的に行った。各活動時における園児の様子（発話を含む）は、ビデオカメラ4台で記録するとともに、活動後には園児に絵を描かせた。さらに、活動に用いた犬については、ストレス状態を計測するためにバイタルチェックを行った。調査は、2010年4月～12月までの間に行った。

③動物飼育・世話体験を通じた共感教育に関する共同研究（広島大学大学院生物圏科学研究科—福山平成大学）

日常的な自然体験や動物の訪問活動を受け入れる環境にない幼稚園については、園内における動物飼育によって、子ども達の自然体験を補うことが可能であると考えられる。実際にわが国の幼稚園の飼育動物としてはウサギが最も人気が高く、多くの幼稚園においてウサギが飼育されているが、その飼育管理が適切に行われているのかは明らかではない。そこでウサギを飼育している幼稚園2園を対象としてウサギの飼育当番時の園児と保育者の様子を参与観察すると共に、保育者の飼育動物に対する意識調査を行った。

調査は、2010年9月～12月に広島県福山市のA幼稚園とB幼稚園において実施した。

4. 結果及び考察

1) 「動物介在教育のための実践コミュニティ (CoP-AAE)」の平成21年度研究成果報告会の実施

平成21年度は、動物介在教育のための実践コミュニティ (CoP-AAE) の各メンバーが、「動物介在教育プログラム」の開発を目指して、「家畜を介した食農教育」「生き物を介した自然環境教育」「動物の訪問による命の教育」「動物飼育・世話体験を通じた共感教育」を実施した。その成果を研究成果報告会で発表するとともに、内容について討議した。さらに、平成22年度の共同研究計画について再度見直しを行うとともに、役割分担を確認した。

幼稚園が動物介在教育を実施する場合、それぞれの園の環境は様々である。身近に自然が豊かな幼稚園のある一方で、都市部では動物を飼育すること自体が困難な園もある。また、犬などの動物の訪問活動をする団体が全国に普及しているわけではない。保育者の動物についての知識には、かなりの差のあることも明らかになっている。これらのことから、全国の幼稚園で動物介在教育を実施するには、様々な環境や条件に応じた教育プログラム作りが必要であることをメンバー間で確認した。

2) 「動物介在教育・食農教育・環境教育」に関する保護者向け勉強会の実施

動物介在教育のための実践コミュニティ (CoP-AAE) のメンバーがこれまでに行ってきた研究成果を、幼稚園の保護者に還元するために、附属三原幼稚園の保護者を対象とした「動物介在教育に関する勉強会」を平成22年10月13日に開催した。勉強会は、主に研究代表者である谷田がパワーポイントを用いて行っ

た。保護者は、初めて耳にする動物介在教育を始め、食農教育や環境教育に対しても関心が高く、多くの質問と感想が寄せられた。また、幼稚園における動物介在教育の実施を希望する声も高かった。さらに、保護者からの声には、今後とも園児だけでなく保護者も共に学ぶ機会を増やしてほしいとの意見もあった。また、保護者と園児が参加する介在教育などの企画も必要であると考えられた。

3) 「動物介在教育のための実践コミュニティ (CoP-AAE)」の平成22年度研究成果中間報告会の実施

動物介在教育のための実践コミュニティのメンバーが平成22年度に行った研究成果の中間報告会を平成22年10月23日に広島アニマルケア専門学校において行った。発表は、広島大学、福山平成大学、広島アニマルケア専門学校がそれぞれ担当している動物介在教育に関する研究を中心に行った。①幼児のための自然体験を通じた環境教育に関する共同研究、②犬の訪問による命の教育—幼稚園に対する犬の訪問活動を通じた動物介在教育に関する共同研究、③動物飼育・世話体験を通じた共感教育に関する共同研究の3つの課題の進捗状況の報告が中心であった。発表後に討議をして、今後の研究計画の一部について軌道修正した。

特に動物介在教育のための実践コミュニティの中間報告会は、異なる機関に所属するメンバーが一同に会し、「動物介在教育」「自然体験」をキーワードとして、これらの研究に関する意見交換とブレインストーミングを行うことで、新たな発見や展望を持つことができた。今後、これらの研究成果について学会等で発表するとともに、動物介在教育のための実践コミュニティのホームページを立ち上げて、研究成果についての情報提供を行うことが提案された。

4) 幼児に対する動物介在教育に関する研究プロジェクト

①幼児のための自然体験を通じた環境教育に関する共同研究

附属三原幼稚園では、園庭における植物栽培や動物飼育などを通して、自然や生き物とのふれあい体験を実施している。一方、附属幼稚園では、園庭以外に「自然の森 (山)」を有しており、5歳児に対しては週に1回「森の日」を設け、自然の中での教育を実施している森の幼稚園である。いずれの幼稚園においてもその園環境の特色を生かした教育を実践しているが、それぞれの保育者の「自然」「環境」「動物」に対する意識と知識には差があるので、今後、実践コミュニティを通して開発する予定の教育プログラムを利用する

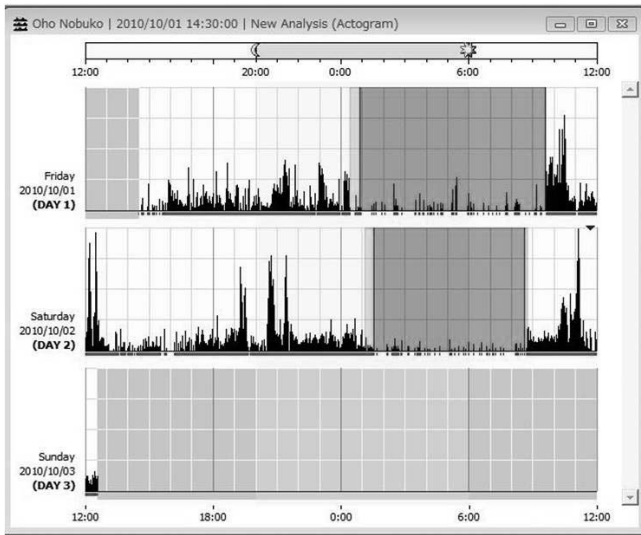


図2 アクティウオッチによる活動・睡眠パターンデータ例

ことによって、より効果的な動物介在教育を展開できるものと考えられる。

また、今回試験的に用いたアクティウオッチは、幼児の運動量、運動パターン、睡眠時間、睡眠パターンを正確に定量化することができたので、今後は、この機器を導入することで、教育プログラムの効果を客観的かつ正確に検証するための一手段となると考えられた(図2)。ただし、アクティウオッチの長期の装着は、幼児の負担を考慮すると3日間が限度であると考えられた。

さらに今回は、幼児に対する参与観察も同時に行ったが、今後は自然活動や飼育動物の世話の場面において、動物や生き物を介しての保育者と幼児の関わりについて焦点をあて観察することで、現場の介在教育に必要な要素を明らかにできると思われた。

②犬の訪問による命の教育—幼稚園に対する犬の訪問活動を通した動物介在教育に関する共同研究

昨年度の犬の訪問活動を通した動物介在教育では、8園に対してそれぞれ1回ずつの訪問をしたが、1回きりの訪問では、子ども達にとって一過性のイベントになってしまい、教育的な効果が低くなってしまいう傾向にあった。そこで今回は、訪問する幼稚園数を8園から4園に減らし、各園に対して3回ずつ訪問することとした。また、訪問内容についても昨年度にはなかった、介在犬に関する事前授業用DVDの上映会を先行することで、犬の訪問に対する子ども達のモチベーションを高めるとともに、犬に触れる場合の心構えや約束等についても学ばせることが可能となった。また、昨年度は、犬とのふれあい活動を中心としたので、訪問した介在犬に単に触れるという、幼児にとっては受

け身的な交流となってしまった。参加した保育者からも、もっと犬と体を動かして遊ぶなど、より密な交流がしたかったという声も聞かれた。しかしながら、介在犬の観点から子ども達とのふれあいを考えると、長時間の直接的な接触による交流は犬に大きな負担となるため、今回は犬の福祉と幼稚園の希望の両面に配慮して、身体的な接触を増やす代わりに、介在犬と子ども達が体を動かしながら交流のできる運動会(アジリティ)を3回目の訪問プログラムに加えた。その結果、幼児のプログラムに対する参加意欲と犬に対する関心は、犬との受け身的なふれあい活動だけの時よりも有意に高まった。以上のことから、プログラムを工夫することによって、介在犬にストレスをかけずに教育効果を高めることが可能であることが示唆された。

今後はレクリエーション的側面だけでなく、「生命尊重の心の育成」「動物愛護(保護)の心の育成」についても効果的に教育できるプログラムを開発・実施し、子ども達とともに保育者の犬に対する意識を高めることが必要であると考えられた。

③動物飼育・世話体験を通した共感教育に関する共同研究(広島大学大学院生物圏科学研究科—福山平成大学)

ウサギを飼育している広島県福山市のA幼稚園とB幼稚園において調査を実施した。両園の飼育当番時のウサギを介した保育者と子どものやり取りを中心に参与観察を行ったところ、園によってウサギの飼育管理、取り扱い方、保育者の声かけ、保育者と子ども達のやり取りには、かなりの差のあることが明らかとなった。また、飼育方法やウサギの飼育環境は、ウサギの福祉の観点から見て、必ずしも適切であるとは言えなかった。また、それぞれの保育者のウサギに対する意識と知識には大きな差が認められたことから、今後はウサギに関するニュースレターなどを保育者に配布することで、保育者の意識の向上を図り、ウサギの飼育環境をより適切なものにした上で、ウサギを介した子ども達の教育を考える必要があると思われた。

5. 成果と課題

本研究では、動物介在教育のための実践コミュニティを通して、各教育機関が共同で研究することによって、様々な動物介在教育の実践とその効果の検証方法について検討することができた。今後はさらに本研究を継続するとともに、これらの成果を基に全国の幼稚園で実践可能なプログラムのレポーターを増やすことが重要であると考えられた。今後の喫緊の課題としては、これらの教育プログラムの教育効果の検証方法

の開発である。教育効果については、短期的な教育効果と長期的な教育効果に分けることができるが、まずは短期的な教育効果について、子ども達の変化をどの

ように客観的に評価検証（数値的な評価も含む）できるのかについて検討することが必要であると考えられた。